

『切韻』における唇音の開合について

遠藤光暁

1. 主 題

前稿「臻櫛韻の分韻過程と莊組の分布」では『切韻』においては唇音の重紐A類は開口韻母群、重紐B類は合口韻母群に位置する傾向が認められる。」と記したことがあった。⁽¹⁾ 小稿ではこの現象に関して全用例を列挙し、反切用字上のふるまいと合わせてその内含する意味を考察したいと思う。そして更に唇音音節全體に問題を擴張して関連事象を論ずる。

2. 唇音重紐の韻内における位置

『切韻』⁽²⁾では、開合などの異なる複数の韻母が一韻内に含まれる場合、同一種の韻母は連続して配置される傾向がある。支韻を例にして見ると次の通り（小韻筆頭字のみを挙げる。開口小韻には何も表示せず、合口小韻の下には下線を引き、唇音小韻の下には波線を引く。各々の小韻群の間を“|”で区切る。）：

支移 | 爲媯⁽³⁾麀⁽³⁾逶⁽³⁾糜⁽³⁾賸⁽³⁾鬢⁽³⁾垂⁽³⁾羸⁽³⁾吹⁽³⁾跛⁽³⁾跛⁽³⁾隨⁽³⁾麴⁽³⁾闕 | 奇⁽³⁾祇⁽³⁾纒⁽³⁾絞⁽³⁾宜⁽³⁾皮⁽³⁾提⁽³⁾兒⁽³⁾離⁽³⁾疵⁽³⁾貨⁽³⁾羈⁽³⁾卑⁽³⁾陴⁽³⁾緇⁽³⁾斯⁽³⁾差⁽³⁾摘⁽³⁾
彌⁽³⁾雌⁽³⁾知⁽³⁾漪⁽³⁾馳⁽³⁾ | 哇⁽³⁾危⁽³⁾ | 訑⁽³⁾彫⁽³⁾醜⁽³⁾ | 鞞⁽³⁾痿⁽³⁾厖⁽³⁾槻⁽³⁾劑⁽³⁾衰⁽³⁾腫⁽³⁾

ここで開口と合口とでいくつかの小韻群に分かれているのは、底本となった複数の先行韻書から重層的に収載項目を取り入れた痕跡だと解される。⁽³⁾

さて、唇音小韻について見ると、開口小韻群の中に位置する場合と合口小韻群の中に位置する場合とがある。ここで、唇音小韻のうち開口小韻群に含まれる「卑陴彌」が重紐A類で（但し「皮」は重紐B類）、合口小韻群に含まれる「糜跛跛」が重紐B類であることが注目される。そして、このような傾向は支韻だけのものではなく、ほかの重紐韻にも見られるのである。

次に、開合の対立のある重紐韻、即ち支・脂・祭・眞・仙・庚清・蒸⁽⁴⁾の各韻系について唇音小韻の全用例を列挙してみよう。以下では、まず各々の韻に關し、開口小韻群の中に位置する唇音小韻を左側に挙げ、合口小韻群の中に位置する唇音小韻を右側に挙げる。各項目の第一字は小韻筆頭字、次に中黒「・」を隔ててそれに對する反切を付す（但し「(—)反」は省略する）。ここで、反切下字が合口字である場合には下線を引き、唇音字である場合には波線を引き、開口字である場合には何も表示しない。更にセミコロンの「;」の後には聲母と重紐の歸屬をAないしBで注し、最後にその小韻が該韻内の何番目の小韻であるかを記す。例外的なもの、即ち開口小韻群に置かれたB類小韻・合口小韻群に置かれたA類小韻については、その項目の前にアスタリスク「*」を付して表示する。なお、震韻の1例と職韻の3例は歸屬を決定するのが困難であるため疑問とし、括弧でくくっておく。

	開 口	合 口
支韻	卑・府移；幫A, 30	陂・彼爲；幫B, 14
	陣・符支；並A, 31	鉞・敷羈；滂B, 13
	*皮・符羈；並B, 23	糜・靡爲；明B, 7
	彌・武移；明A, 36	
紙韻	俾・卑婢；幫A, 26	彼・甫委；幫B, 4
	諱・匹婢；滂A, 40	被・皮彼；並B, 5
	*攷・匹靡；滂B, 39	靡・文彼；明B, 3
	婢・便俾；並A, 29	
	溯・民婢；明A, 28	
寘韻	譬・卑義；幫A, 15	賁・彼義；幫B, 11
	譬・匹義；滂A, 21	岐・披義；滂B, 10
	避・婢義；並A, 2	髮・皮義；並B, 12
脂韻	紕・匹夷；滂A, 38	悲・府眉；幫B, 28
	毗・房脂；並A, 4	丕・敷悲；滂B, 33
		邳・符悲；並B, 32
旨韻	七・卑履；幫A, 8	眉・武悲；明B, 27
	*鄙・方美；幫B, 4	語・匹鄙；滂B, 24
	牝・扶履；並A, 14	否・符鄙；並B, 22
	*美・無鄙；明B, 3	
至韻	痺・必至；幫A, 39	秘・鄙媚；幫B, 8
	屁・匹鼻；滂A, 20	凜・匹備；滂B, 10
	鼻・毗四；並A, 37	備・平秘；並B, 11
	寐・蜜二；明A, 23	鄙・美秘；明B, 3
祭韻		*蔽・必袂；幫A, 14
		*弊・毗祭；並A, 11
		*袂・彌弊；明A, 16
真韻	賓・必鄰；幫A, 30	斌・府巾；幫B, 45
	民・彌鄰；明A, 29	*繽・敷賓；滂A, 36
		*頻・符鄰；並A, 35
		貧・符巾；並B, 47
		珉・武巾；明B, 46
軫韻	泯・武盡；明A, 17	*牝・毗忍；並A, 7
震韻	偵・必刃；幫A, 8	慙・眉殞；明B, 6
	(? 宋・撫刃；滂A, 28)	
質韻	必・卑吉；幫A, 23	筆・鄙密；幫B, 41
	匹・譬吉；滂A, 8	弼・房律；並B, 43

『切韻』における唇音の開合について

	蜜・民必；明A, 22	* 郊・毗必；並A, 31
		蜜・美筆；明B, 42
仙韻	鞭・卑連；幫A, 30	
	篇・芳連；滂A, 17	
	便・房連；並A, 18	
	綿・武連；明A, 19	
獮韻	編・方緬；幫A, 20	辨・方免；幫B, 23
	榧・符善；並A, 38	
	* 辯・符蹇；並B, 18	
	緬・無亮；明A, 19	
	* 免・亡辨；明B, 39	
線韻	騶・匹扇；滂A, 32	變・彼眷；幫B, 21
		卞・皮變；並B, 24
		* 面・彌戰；明A, 8
		* 嬖・扶列；並A, 34
辭韻	驚・井列；幫A, 11	
	* 筍・方列；幫B, 27	
	覽・芳滅；滂A, 25	
	* 別・憑列；並B, 26	
	滅・亡列；明A, 10	
庚韻	* 平・符兵；並B, 15	兵・甫榮；幫B, 21
	* 明・武兵；明B, 17	
梗韻	* 丙・兵永；幫B, 2	皿・武永；明B, 7
敬韻	* 病・皮敬；並B, 9	柄・彼病；幫B, 12
	* 命・眉映；明B, 8	
清韻	并・府盈；幫A, 16	
	名・武并；明A, 14	
靜韻	餅・必郢；幫A, 9	
勁韻	擗・卑政；幫A, 10	
	聘・匹正；滂A, 8	
	俛・防政；並A, 11	
	詔・武聘；明A, 15	
昔韻	辟・必益；幫A, 15	
	僻・芳辟；滂A, 16	
	擗・房益；並A, 13	
蒸韻	* 冰・筆陵；幫B, 7	
	* 憑・扶水；並B, 6	
職韻	(? 遍・彼側；幫B, 21)	
	(? 樞・芳遍；滂B, 24)	
	(? 懷・符遍；並B, 26)	

以上が即ち冒頭で述べた「『切韻』においては唇音の重紐A類は開口韻母群、重紐B類は合口韻母群に位置する傾向が認められる」という現象である。ここで全數（但し前述の震韻の1例と職韻の3例は除外する）を集計すると、開口小韻群に現れる唇音小韻が全部で61あるうち46(76%)が重紐A類、15(24%)が重紐B類となっており、合口に關して言うと全41小韻のうち32(78%)が重紐B類、9(22%)が重紐A類となっている。

例外の中にはある種の傾向性が認められるものがある。祭韻の場合、唇音小韻が3つありいずれも重紐A類であるが、全てが合口小韻群に位置している。また蒸韻の唇音小韻2例は共に重紐B類で、いずれも開口小韻群に位置している。庚梗敬韻に含まれる唇音小韻はいずれも重紐B類であるが、通算8小韻あるうち5例までが開口小韻群に位置している。ここで、蒸韻（相配する上去聲韻には唇音小韻が存在せず、入聲韻の唇音小韻は開合いずれの小韻群に屬するかが不明である）および庚梗敬韻（陌韻3等には唇音小韻が存在しない⁽⁶⁾）が開口の如く扱われることは第5.3節で見るように奥舌韻尾と關係があると見られる。また、韻内の層位の別と平行する場合もある。紙韻第39小韻の「𪛗」はB類なのに開口小韻群に含まれているが、これは第3層に屬し、第3・4・5小韻にあるその他の唇音B類とは別の底本に由來するものと見られる。また、旨韻の第3・4小韻の「鄙」「美」は韻首、即ち開皇初の筆記に由來すると思われる部分に含まれ、底本となった先行韻書における元來の收載位置を反映するものとは認められない。ほか、眞韻の第35・36小韻「頻」「續」は第2層に屬し、同じく唇音A類でも規則的な「賓」「民」が第1層すなわち主層に屬すのとは異なる。質韻の第31小韻「𪛗」は第3層に含まれ、他の規則的な唇音A類の「匹」が第1層、「必」「蜜」が第2層に含まれるのとは由來が異なるものと見られる。

いま別層に屬するため例外的な扱いになっていると思われる例を挙げたが、最後に見た「匹」と「必」「蜜」の場合のように合規則的な例は層の違いを超えて現れることも少なくない。これは、唇音に關し重紐A類を開口小韻群、重紐B類を合口小韻群に收載する方針の先行韻書が少なくなかったことを意味するであろう。ただ、残念ながら現在の研究段階においては各層の所據韻書を同定するまでには至っていないため、どのような先行韻書がこのような收載方針を採り、どのような先行韻書がそうではなかったかを詳細に推定することは難しい。

3. 唇音重紐の反切下字

唇音重紐小韻は反切下字の面でもA類とB類とが異なる選擇傾向を示す。

前節に掲げた唇音重紐小韻の一覽表では反切下字が合口字であるものと唇音字であるものに印をつけておいたが、それを集計すると次のようになる：

		A 類	B 類
反切 下字	開口	41(73%)	15(30%)
	唇音	15(26%)	26(52%)
	合口	0(0%)	9(18%)
計		56	50

つまり、合口の反切下字をとるのはB類に限られ、A類で合口下字が用いられること

は絶えてない。また開口下字をとる小韻はA類では73%を占めるのに對してB類では30%に過ぎず、それとは裏腹に唇音下字をとる小韻はB類では52%を占めるのに對してA類では26%に過ぎない。

反切は『切韻』の音價推定の上で最も直接的な根據となるものであるが、ここでも唇音重紐A類は開口に類する特性を示し、重紐B類は合口ないし唇音獨自の特性を帯び、開口とは類縁関係が薄いことが分かる。⁽⁸⁾

4. 唇音重紐の音聲實現の一側面

上の2節で見た現象は、重紐問題に関する學說史の片隅に忘れ去られたかの感のある王靜如「論開合口」で提出された「唇音有二種、一具撮口勢 (p^w-), 一爲平唇 (p-)。……三等韻中重出之唇音、其三等爲撮唇而四等爲平唇。」という説に新たな照明を投げかけるものである。⁽⁹⁾

同氏はその根據をいくつか挙げているが、そのうち現代方言や元代のパスパ文字對音および『西儒耳目資』における止攝唇音重紐の反映の例は意義深い。まず現代方言の例であるが、汕頭、客家、福州の方言においては唇音A類が單純な pi, p'i, mi などであるのに對してB類は pui, p'ui, mui などのように合口介音を伴っている。またパスパ文字對音や『西儒耳目資』でも同様にA類は普通の唇音でB類は合口介音を伴っていることが窺われる。これら現實の言語音において唇音重紐がA類開口：B類合口という姿をとって現れていることは、『切韻』においてもそれに類似した状態が存在したと推定することを支持する。⁽¹⁰⁾

但し、それは唇音重紐の音聲實現の一側面であって、それを直ちに唇音重紐の辨別特徴であると認めてよいかは別問題である。前の2節では合口韻母を持たない重紐韻・宥幽侵鹽の各韻系を論議の對象からはずしていた。これらの韻系においては唇音韻尾が合口介音を排除しているのだが、同様の音聲的理由によってこれらの韻系における唇音B類も合口介音に類する出わたりを帯びることが抑止されていたと考えられる。それ故、唇音重紐を全體として扱うには開合は不適であると判断される。

重紐に関しては、有坂秀世氏による拗介音の口蓋的 i と非口蓋的 i の別を立てる解釋⁽¹¹⁾が有力であるが、服部四郎氏はそれを踏まえた上で更に體系上の考慮から重紐の辨別特徴を聲母の口蓋化の有無に歸する解釋を案出された。⁽¹²⁾このような立場からも上で見た現象を説明することは可能である⁽¹³⁾と考える。それは次の通り：

まず、有坂説と服部説の違いを見母について示すと次の如くなるという：

有坂説	服部説
ki-	[kii-]/ki-/
ki-	[k'i-]/kji-/

これを唇音に敷衍すると、例えば幫母ではA類 [p'i-]/pji-/：B類 [pii-]/pi-/ の如くであったことになる。子音の口蓋化の有無の對立は例えばロシア語などに存在するが、пить [p'it']/pjit'/：быть [biit']/bitj/ の如く子音の出わたりにも差異をもたらし、口蓋化子音の後には [i] 類、非口蓋化子音の後には [i] 類の母音が入る。さて、『切韻』において唇音B類が非口蓋化聲母を持ち、[i] 様の出わたりを伴ったとすると、その音色が暗音性である點で [u] と共通し、他の調音點の聲母の後で存在する合口介音

に類似した側面を持つ。そこで、唇音重紐B類は合口韻母に準ずるものとして、小韻排列上では合口小韻群に置かれ、反切下字も合口字を取ったり、開口字との音聲的類縁が小さいため開口下字を避けて唇音の下字を取る傾向が生じたのであろう。一方、A類は口蓋化聲母が口蓋的拗介音*i*を従え、*i*の發音は口角を横に引く動作を伴うものであるから唇をすぼめる動作とは相矛盾した方向性を持つ。そこで、合口の調音を伴うことなく、小韻排列上では開口韻母として扱われ、反切下字も主に開口字が宛てられることとなったのであろう。

なお、現代諸方言やパスパ字對音、『中原音韻』、『西儒耳目資』などにおける反映は後の音韻變化を経たものと考えられる。これらの資料においては止攝重紐B類が完全な合口介音をもつ（か又はそのような段階を経て $pui > pei$ となった）ものとして現れているが、もしも『切韻』の段階で既にそのような状態であったとするならば直音の反切上字をとって然るべきであるが、実際には拗音の反切上字をとっているのであるから、非拗音化は『切韻』の後に起こったとせねばならないからである。その際、『切韻』の段階では非辨別的であった合口性が、口蓋化の有無の特徴の消失に伴い、止攝に限っては一部の音節において辨別特徴となったものと見なされる。⁽¹⁴⁾

重紐に關連して口蓋化と合口性が背反する面をもつことは有坂秀世「唇牙喉音四等に於ける合口性の弱化傾向について」⁽¹⁵⁾がつとに示すところである。該論文は牙喉音において合口の重紐A類と四等韻（周知のように四等韻は早い段階に拗音化して重紐A類と合流した）が開口に變化する現象を主に指摘したものであるが、この場合は口蓋調音はそのまま保たれ、合口性が失われたものである。

5. 唇音音節全般の開合

ところで、唇音音節においては開合が對立しない、というのが『切韻』のみならず中國語の各時代・各方言を貫く通則であるとされている。⁽¹⁶⁾

これは確かに例外の非常に少ない規則ではあるが、⁽¹⁷⁾ その場合でも各音韻體系において唇音聲母が開口なり合口なりのいずれかの韻母としか結合しないわけではなく、ある条件下では開口韻母と結合し、ある条件下では合口韻母と結合し、またある条件下では中間的である、という具合になっているのがむしろ常態である。例えば、現代北京方言では唇音聲母は通例開口韻母と結合し、合口韻母とは結合しないが、單韻母に限ってはuと結合し、また拼音字母でoと綴られる韻母とも結合する。最後の場合、つまり bo , po , mo , fo は丁寧に發音した場合にはu介音を伴うことがあり、この音節は合口だと考えられる。⁽¹⁸⁾唇音聲母の後では / ə / と / uə / の對立は中和しているのであるが、⁽¹⁹⁾ それが開合どちらの韻母であるかを詳定することは單なる音聲學上の問題ではなく、音韻論的な課題でもある。『切韻』においても介音の開合の對立が唇音聲母の後で中和するからといってそこで問題が終わりになるわけではなく、⁽²⁰⁾ 各々の音韻環境において中和した音韻對立のどちらの項が現れるかを詳定する必要がある。

『切韻』における唇音の開合の問題はこれまでも、1) 開合で分韻される場合どちらに含まれるか、2) 唇音音節のとる反切下字の開合、3) 韻圖における配置、4) 輕唇音化との關連で後代に輕唇音化する音節を合口・それ以外の拗音音節を開口とする、などといった根據に基づいて論じられている。その中でも王靜如氏の推定は最も細かく、1等

『切韻』における唇音の開合について

韻のうち灰・魂・桓・戈の唇音は「撮唇之強合口」で pu- であり、その他の一等韻、泰・唐・登および2等韻のうち佳・山・庚・銜および重紐B類は「開口撮唇」で p^w- であり、上記以外の2等韻は「平唇弱合」で pw- であり、4等韻及び重紐A類は「平唇」の p- であるという⁽²¹⁾。但し、ここで1等韻において桓・戈なる韻目名が出て来ているが、この場合『廣韻』の分韻に基づいて陸法言『切韻』の状況を推定するのは問題があり、同様に『韻鏡』などの韻圖における状況も結局の所は別資料なのであるから決定的な根拠とすることはできない。また、後に輕唇音化を起こした音節を合口と認めるというのは一種の音理に基づく推論であって、確かに事実がそうであったかは別途に考證を必要とする問題である⁽²²⁾。

以下ではあくまでも陸法言『切韻』自體に即し、1) 開合別韻となっている場合の唇音小韻の歸屬、2) 開合韻母を含む韻での唇音の小韻群における位置、3) 反切下字、等の根拠に基づいて、重紐韻以外の韻における唇音の開合を歸納的に調べてみることにしよう。但し、この場合も開合の對立を全くもたない通・江・遇・流・効・深・威の諸攝については論外とせざるを得ない。

5.1. 開合別韻の場合：灰哈・魂痕・文殷

まず、最もはっきりしているのは開合で別韻となっている場合である。陸法言『切韻』の段階では灰哈・魂痕・文殷の諸韻系が開合別韻となっており、後2者においては唇音小韻は魂・文韻系に含まれ、合口の扱ひとなっている。だが、灰哈韻系に関しては下表の如く状況がやや込み入っている⁽²³⁾：

	哈 灰	海 賄	代 隊
幫	杯布回		背補配
滂	胚芳杯	啡疋愷 倍普乃	配普佩
並	裴簿恢	倍簿亥 琲藩罪	佩簿背
明	枚莫杯	穉莫亥 洩武罪	穉莫代 妹莫佩

ここで、平聲においては唇音小韻は灰韻にのみ含まれ哈韻には現れないのだが、上去聲では開合兩韻に共に現れ、對立をなすかの觀を呈するのである。この状況は、『切韻』が共時的音韻體系を如實に反映すると見なす立場からは、例えば本稿の注17で述べた邵陽方言のように方言層の重合を反映したものと解釋することもできよう。だが、以下に見るようにこれらの「對立」例は韻内の層位の別と平行し、陸法言が諸異質底本の成分を完全に統一しなかったために見かけ上生じたものと考えられる：

まず、韻目下注によると灰哈韻系を分韻したのは、灰韻に「夏侯、陽、杜與哈同、呂別、今依呂。」、賄韻に「李與海同、夏侯爲疑、呂別、今依呂。」、隊韻に「李與代同、夏侯爲疑、呂別、今依呂。」とあるように呂靜『韻集』に依ったものである。そこで、灰哈韻系の主層は呂靜『韻集』に由來するものと推定される。

平聲において唇音小韻が灰韻に含まれているのは呂靜の收載方針を受け継いだものであるろう。

次に上聲について見ると、海韻では第7小韻「亥」以前のの小韻は韻目を除き全て「亥」

を反切下字としているが、第8小韻以下は様々の反切下字が用いられ、第7小韻以前が呂靜に由來する主層であり、第8小韻以下は追加層であると見られる。そして、海韻に見える唇音小韻は滂母が第8小韻、明母が第12小韻、滂母が第14小韻⁽²⁶⁾、並母が第16（最終）小韻、といったように全て追加層に現れるのである。ここで唇音小韻が開口韻に收められているのは呂靜以外の先行韻書の状況を反映するものであろう。一方、賄韻では第4小韻以前が反切下字「猥」をとり、第5小韻以下最終の第15小韻までが主に反切下字「罪」をとるのだが、呂靜『韻集』が第4小韻以前しか収録していなかったとすると字数が少なすぎるし、また第5小韻以下が単一の反切下字に統一される傾向があることから、第5小韻以下の方を主層と見なす方が適切であると考えられる。そして唇音小韻は明母が第5小韻、並母が第14小韻で、この呂靜に由來すると思われる層の方に現れる。即ち、海韻と賄韻におおの含有される唇音小韻は所據底本が異なっており、開口として扱いか合口として扱いかはそれぞれの韻書作者の判断に基づいたものであろう。本来は同音とすべき音節もひとたび別々の韻に收めてしまうとそれぞれの韻の中では不都合がないため、⁽²⁷⁾ 架空の「音韻對立」ができて見直しの過程でその誤りを発見するのは困難だと思われる。

去聲においては唇音小韻は主に合口の隊韻に現れ、これは平聲に平行するものであるが、開口の代韻にも第3小韻に明母小韻が現れる。代韻は第1小韻から第5小韻および第11小韻から第15（最終）小韻までが「代」を単一反切下字としており、中間の第6小韻から第10小韻までは牙喉音が集中して配置され多く「愛」を反切下字としている。この状況は解釋が難しいが、少なくとも第3小韻の含まれる部分は主層、即ち呂靜『韻集』に由來するものと認めることとなろう。ここで問題なのは、平・上聲との平行性からして唇音小韻を合口の隊韻に含ませるのが呂靜『韻集』の收載方法だと推定されるのだが、開口の代韻においても同じく呂靜に由來すると考えられる部分に唇音小韻が現れることである。

問題の小韻は「襍」の一字のみからなり、切韻諸本の比較からして祖本では「禾傷雨。莫代反。又莫亥反。一。」となっていたと推定される⁽²⁸⁾。この又音は海韻の第12小韻にあり、この小韻も「襍」だけからなり「禾傷雨。莫亥反。又莫代反。一。」とある⁽²⁷⁾。この兩小韻は義注も同じく、反切・又切の用字も互いに一致する。そこで、代韻の方の小韻は陸法言が海韻の方を元にして挿入したものと考えることによって上で述べた問題点が説明できるであろう。海韻の側の小韻はそもそも唇音を開口相當として扱う底本の層に属するので問題ない。ちなみに、追加小韻は陸法言の段階でも韻末に付け加えていくことが多かったと思われるが、韻の中途に挿入されたと推定されるケースも存在する⁽²⁹⁾。

反切用字上のふるまいについて言うと、魂・文の兩韻系ともに唇音小韻に唇音反切下字を宛てる場合が多く、更に混韻の「本」、沒韻の「沒」、物韻の「物」などはその他の聲母の小韻に対しても反切下字として広く用いられている。また、隊韻でも唇音小韻は全て唇音反切下字を取っている。但し、これらに対して音聲的な意味づけを行うのは困難である。

5.2. 開合韻における唇音の開合

次に一韻内に開合兩韻母を含む韻に関して唇音の開合を見てみよう。ここでも、重紐

『切韻』にけおる唇音の開合について

韻における場合と同じように該字が開口と合口のいずれの小韻群に含まれるかと反切下字の2つの面から観察する。

等位ごとに表を作るが、1・2・3等では欄の都合で表が2枚にわたっている。下表では各韻の唇音小韻が開口小韻群に含まれている場合は第1欄にその字母名を記し、合口小韻群に含まれている場合は第3欄に記し、境目に位置してどちらの小韻群に属するか判断し難い場合は第2欄に記す。またそれらの小韻に対する反切下字が合口字である場

表 I

	泰	寒	旱	翰	末	歌	哿	箇
開口小韻群	幫滂並	幫滂並明				幫滂並明	明	幫
所屬不明			明	幫滂並明				
合口小韻群			幫並		幫滂並明		幫滂	滂明

表 I'

	唐	蕩	宕	鐸	登	等	噎	德
開口	並明	幫明	幫並	幫滂並明	幫明	滂	幫明	幫明
不明	滂				並			並
合口		滂				—	—	

表 II

	佳	蟹	卦	皆	怪	夬	刪	潛	諫	黠	山	產	禡	鎋
開口	並明	幫並明	明	並明	並明				明	並明	幫	明	滂並明	幫明
不明			幫滂並				滂	幫並明		並明				
合口		—			幫滂	並明	幫明		滂	滂		—		

表 II'

	麻	馬	禡	庚	梗	敬	陌	耕	歌	諄	麥
開口	幫滂明	幫並明	明				幫並明		並明		滂並
不明	並		幫滂並	滂並明	明	明	滂	幫滂並明			幫
合口				幫					—	—	幫明

表 III

	微	尾	未	廢	元	阮	願	月
開口		幫滂明						
不明								
合口	幫滂並明	並	幫滂並明	幫滂並	幫滂並	幫並明	幫滂並明	幫滂並明

表 III'

	陽	養	漾	藥
開口	幫並明	幫滂明		
不明	滂		幫滂明	
合口				並

表 IV

	齊	霽	霽	先	銑	霰	屑	青	迥	徑	錫
開口	幫滂並明	滂並明	幫滂並明	並明	幫明	幫滂明	幫滂並明	滂並明	滂並		滂並明
不明									幫明	明	幫
合口				幫	並						

合は字母の下に直線を引き、唇音字である場合は波線を引き、開口字である場合には何も表示しない。ほか、そもそも合口韻母が存在しない場合⁽²⁹⁾、その韻の合口欄に横線を引いておく。また表中ではどの唇音小韻が韻内のどの層に含まれているかは表示しないが、層位の違いに応じて属する小韻群が異なっている場合には以下で解釋を行う際に随時言及する。

まず、1等韻について見ると、泰韻と登韻系は属する小韻群から言っても反切下字から言っても開口として扱われている。歌・唐の兩韻系も大勢としては開口として扱われる傾向が認められるが、帮韻の幫滂、箇韻の滂明、蕩韻の滂の各小韻が合口小韻群に置かれ、帮韻の幫、箇韻の滂、唐韻の並、宕韻の幫の各小韻が合口反切下字を取っている點は合口的である。寒韻系では錯綜した状態となっており、寒韻ではすべての唇音小韻が開口小韻群に位置するが、末韻ではすべて合口小韻群に位置し、輪韻ではどちらに属するか判断しがたく、早韻では2小韻が合口小韻群に位置し、1小韻は所屬不明である。反切下字について言うと、寒韻の滂並、早韻の幫、末韻の滂の各小韻が合口下字を取っている。以上をまとめると、

開口：泰韻・登韻系、開口的：歌・唐韻系、やや合口的：寒韻系⁽³⁰⁾
の如くなる。

2等韻では、蟹攝と山攝に興味深い現象が見られる。まず蟹攝において、平上聲が開口として扱われているのに對して、去聲の卦・怪・夬の各韻が合口的な振舞いをしていいる。卦・怪韻の状況をより詳密に言うと、卦韻では第1層に属する唇音小韻は開口小韻群に置かれて開口下字を取り、第2層では合口下字を取っており、怪韻では第1層に属する唇音小韻は合口小韻群群に置かれて合口ないし唇音下字を取り、第2層では開口小韻群に置かれて開口ないし唇音下字を取っている。この状況の背後には蟹攝2等韻唇音音節が平上聲では開口、去聲では合口となっていた方言の存在が想定される⁽³¹⁾。また、山攝では刪韻系が合口的であるのに對して山韻系は全く開口として扱われており、唇音小韻の扱いが對照的である。これは兩韻系の何らかの音聲的差異を物語るものである。ちなみに刪韻系では上聲においては「板」、入聲においては「八」が開合兩韻母を通して反切下字として多用され、唇音字が反切下字として用いられることの少ない『切韻』にあって例外的である。その他の2等韻、麻・庚・耕の各韻系はほぼ開口的であると言ってよからう。

C類韻では廢韻と元韻系は全く合口として扱われており、微韻系も尾韻を除き合口的である。尾韻では第1層に含まれる唇音小韻は開口小韻群に置かれ、第2層では合口小韻群に置かれている。これらに對して、陽韻系は藥韻の並母小韻を除き開口的な振舞いを見せている。ほか、C類韻全體を通して唇音下字を取る傾向が著しい。

4等韻は全般的にはほぼ開口的であるとしてよからうが、先韻の幫、銑韻の並の2小韻が合口小韻群に置かれ、先韻の幫、迥韻の滂並明の各小韻が合口下字を取る點は合口的である。

5.3. まとめ

以上見てきた所と第2節で見た重紐韻における状況をまとめると次頁の表の如くなる。唇音小韻が開口的に扱われている場合をp、合口的に扱われている場合をp^wで表

『切韻』における唇音の開合について

	-φ	-i	-n/-t	-ŋ/-k
1等韻	歌 ^p	泰 ^p 灰 [?] 咍 [?]	寒 [?] 魂 ^{p^w}	唐 ^p 登 ^p
2等韻	麻 ^p	平上聲 ^p 去聲 ^{p^w}	刪 ^{p^w} 山 ^p	庚 ^p 耕 ^p
4等韻	—	齊 ^p	先 ^p	青 ^p
C類韻	—	微 ^{p^w} 廢 ^{p^w}	元 ^{p^w} 文 ^{p^w}	陽 ^p
A類	支 ^p 脂 ^p	祭 ^{p^w}	眞 ^p 仙 ^p	清 ^p
B類	支 ^{p^w} 脂 ^{p^w}	—	眞 ^{p^w} 仙 ^{p^w}	庚 [?] 蒸 ^p

してある。この表の範囲で言うと、

- 1) 韻尾が -ng/-k である場合には唇音小韻が開口として扱われる；
- 2) その他の韻尾の場合にはB類・C類および主母音が^oの場合に合口として扱われる、という傾向が見いだされる。ほか、
- 3) 蟹攝2等去聲・刪韻系・祭韻A類は合口的に振る舞う
 点については今のところ系統的な規則化ができず、個別的に述べるほかない。そして、
- 4) これら以外の場合には開口として扱われる。

さて、以上のような状況は何を意味するであろうか。

傾向1の存在は當初豫測していなかったものである⁽³²⁾。通江攝とは異なり、宕曾梗攝には開合の別が存在するから合口介音-uと韻尾-ng/-kとが排斥する関係にあるとは思わなかったためである。しかし、改めて検討してみると、宕曾梗攝の合口韻母は牙喉音聲母の後でのみ存在するのである。この場合、音節開始部で舌根が軟口蓋の位置にあるため、その後にuを介在させても主母音に移行する途中の位置であるから調音に困難はない。だが、その他の調音点の聲母の場合、uを介音とするためには舌位を後上方にわざわざ移動させることになる。そして、韻尾に-ng/-kが来ると、やはり舌位を後上方に移動させることになり、同じ動作を介音と韻尾で繰り返す必要がある。中國語の音節構造では介音と韻尾が同音になることを避ける強い制約傾向があるが、-uは-ng/-kと調音面で類似性があるためやはり牙喉音聲母の後という-uの調音が特に容易な条件下以外では排斥されたのであろう。そして、唇音聲母の後でもやはり韻尾-ng/-kの存在が介音-uの寄生を抑制していたのであろう。

傾向2のうちB類が合口的である点については既に音聲的な解釋を行ったけれども、C類および1等韻のうち主母音が^oの場合に合口的である点も主母音が暗音であるため唇音聲母も類似の音色をもつuを帯びることとなったものであろう。

第3項のそれぞれのケースについては未だ適当な解釋を得ていない。

第4項については、2等韻と4等韻が平唇のPであることはそれらの主母音が前舌音で明音の音色をもつことによるであろう。1等韻の歌・泰などが開口であるのは主母音^aの開口度が最大で唇のすぼめと矛盾するからであろう。但し聲母と主母音の移行をよりゆるやかにしようとするならば間にuを介在させる變化が起り得る。⁽³⁴⁾

開合が對立しない通・江・遇・流・効・深・咸の諸攝に關しては、唇音の開合についても『切韻』内部の證據に基づいて實證的に論ずることが困難である。ここでは大まか

な見通しとして、合口韻母をもっていたと思われる通・遇攝では唇音も合口的に發音され、開口韻母をもっていたと思われる江・流・効・深・咸の諸攝では唇音も開口的に發音されたと推定しておく。

ここで付言しておく、以上からして輕唇音化が唇音拗音合口を条件として生じたとする説が成り立ち難いことが見て取れる。上の結果によるならば、輕唇音化を経た韻でも陽韻系などは開口相當であったと推定され、また支脂眞仙の諸韻系のB類や祭韻などは合口相當と考えられるのに輕唇音化が生じていない。ほか尤・凡の韻系は唇音韻尾を持つため合口ではなかったと推定されるが輕唇音化が生じている。

なお、小稿で見えてきた唇音の開合に關する状況は『切韻』を全體として扱って歸納したものであるが、これが陸法言の個人言語の共時態をすみずみまで忠實に反映したものであるとは必ずしも言えない。例外の中には所據底本の別と平行する場合があります、これは唇音の開合に關して異なる扱いをした先行韻書の成分をそのまま取り込んだものと考えられるからである。だが、上記の傾向が層位の別を超えて成り立つ場合もまた少なくないから、このような發音傾向は多くの先行韻書に共通したものであり、陸法言の發音もこれにかなり近いものであったと見なして大過なからう。

注

- (1) 『日本中國學會報』42, 1990年, 259頁, 注10。
- (2) 具體的には上田正『切韻諸本反切總覽』, 京都, 均社, 1975年の推定による陸法言由來の小韻・反切・小韻順を指す。
- (3) 拙稿「『切韻』小韻の層位わけ」『青山學院大學一般教育論集』30, 1989年を参照。
- (4) 庚・清韻系はそれぞれの一韻内で「紐が重なる」ことはないが、他の重紐韻に準ずるものとする（これについては注1所引拙稿の第5節を参照）。蒸韻系を重紐韻と見なすことは平山久雄「切韻における蒸職韻と之韻の音價」『東洋學報』49:1, 1966年に據る。その他の重紐韻、宵・幽・侵・鹽の各韻系は開合の別がないため、ここでは議論の對象としない。
- (5) 李榮『切韻音系』, 中國科學院, 1952年, 57頁には2小韻擧げてあるが、いま注2所引書(207頁, 注5・6)がそれらを増加小韻と認めているのに従う。
- (6) 韻内の層位わけに關しては注3所引論文の付録1を参照。以下同。
- (7) 遠藤光曉「『切韻』「序」について」『青山學院大學一般教育論集』31, 1990年, 第3節を参照。
- (8) このことは既に陳澧『切韻考』（1842年序, 音韻學叢書本, 四川人民出版社, 1957年, 卷4, 9b—16bなど）でも部分的には示されている。そこでは唇音B類小韻が合口や唇音の反切下字をとる場合などに合口韻母の欄に置かれることがある。但し唇音B類が開口下字をとっていると開口欄に置いたり、唇音下字をとるA類小韻を合口欄に置いたりしているから、重紐の扱いは未だ徹底したものではない。
- (9) 『燕京學報』29, 1940年, 190頁。陸志韋『古音說略』もと1947年, 台灣學生書局影印, 1971年, 18頁も同説である。
- (10) 注9所引論文162—164頁参照。蔡堂明保『中國語音韻論』, 江南書院, 1957年, 187—188頁（光生館1980年版では217—218頁）は更に『中原音韻』でも止攝唇音重紐A類が開口, B類が合口として反映されることを述べ、現代北京音でも悲 bei: 比 bi のように重紐の痕跡をとどめているとしている。ちなみに現代北京音のような反映は他の北方方言でも割合よく見られるもの

『切韻』における唇音の開合について

である。

- (11) 「カールグレン氏の拗音説を評す」もと1937-1939年、『國語音韻史の研究・増補新版』所収、三省堂、1957年など。
- (12) 「上代日本語の母音体系と母音調和」もと1976年、服部四郎ほか編『日本の言語学』第7巻・言語史所収、大修館書店、1981年、254頁によるとこの説を思いついたのは戦前のことであるという。実際には三根谷徹「韻鏡の三・四等について」『言語研究』22/23、1953年によってこの説が展開されたため現在では普通「三根谷説」と呼ばれているけれども、名前を以て稱する場合には「服部説」ないし「服部—三根谷説」とするのが適切である（三根谷論文66頁の注1を参照）。
- (13) 服部四郎「中古シナ語の研究」、注12所引書、702-703頁。但し印刷を容易にするため音節副音とB類のiが後よりだという記號は省略し、口蓋化は該子音の直後の「'」で表す。
- (14) それらが止攝に限られる理由は、韻尾を持たず介音のための配分時間が相対的に長いためだと考えられる。
- (15) もと1940年、注11所引書所収。
- (16) これを述べた論著は少なくない。例えば、Li Fang-kuei, "Archaic Chinese *-i-wəŋ, *-i-wək and *-i-wəg", *Bulletin of the Institute of History and Philology*, 5:1, 1935, p.71; Yuen Ren Chao, "Distinctions within Ancient Chinese", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 5, 1940, pp.217-223; 董同龢『上古音韻表稿』もと1944年、歴史語言研究所單刊甲種21、1975年、64-66頁; 李榮『切韻音系』、中國科學院、1952年、91頁; 注10所引藤堂著、209-212頁（新版では242-245頁）等々。
- (17) 私は1983年7月に北京大學中文系の方言調査實習で湖南省邵陽市に滞在した折に唇音の後で開合の區別のある方言に接したことがある。それは邵陽市内方言の生え抜きの話者・郭輝樓氏（1919年7月生）のもので、山攝一等桓韻系（これは『方言調査字表』に基づくため『廣韻』の韻目である）において問題の現象が見られる。「般」は多く[pan陰平]と發音するが、「洋氣」な發音として[puan陰平]とも發音する。また「搬」は多く[puan陰平]と發音するが、「洋氣」な發音として[pan陰平]とも發音する[この2例は状況が逆になっているが、話者の報告の通りを記す]。以下は[-an]か[-uan]かのいずれかの發音しかない：潘 phan陰平、盤 buan陽平、瞞 muan陽平、饅 man陰去、伴拌 buan陽去、滿 muan上聲、半 puan陰去、絆 buan陽去、判叛 phan陽去、漫慢 man陰去（拵は[phin陰平]となっており、また入攝は全て[-o入聲]の韻母となっている）。これは恐らく[-uan]の韻母の方が固有層で、そこに[-an]と發音する方言（おそらく普通話）の層が重合したものであろう。その理由は單音節動詞として使う「搬」に關し[puan]が普通で[pan]が氣取った言い方だという話者の報告と（「般」の方は恐らく「一般」のような硬い語彙でのみ使うものであろうことから「搬」の報告の方を重視する）、「饅頭」の「饅」が[man陰去]である（當地は米食の地域で普段マントウを食べることはなく、また聲調が不規則な對應を示すことから借用層であることが窺われる）ことに據る。字づらを見ても[-uan]という韻母になっているものは基礎的な形態素が多く、[-an]という韻母になっているものは文章語的な硬いものが多い。但しこのような状況になっているのはこの話者（拙稿「邵陽方言の聲調」『中國語學』231、1984年と言うところの「話者乙」）のみで、中年（同「話者甲」）・青年（同「話者丙」）の話者はこれらを一律[-an]と發音する。
- (18) 詳しい議論は平山久雄「北京語 [v-] の音韻論的解釋」、服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員會編『現代言語學』、三省堂、1972年、67-68頁を参照。この解釋はある北京人の話

者の判断とも合致する。

- (19) 拼音では「什麼」「這麼」「那麼」「多麼」などの第2音節を me と綴る習慣になっているため、mo に對する開口音節があるかの外見を生じているが、この音節は共時的には /ma 輕聲/ と考えるのが至當であり、本來なら拼音でも ma と綴るべきものである。なお通時的には「什麼」の第2音節は古く「物」と書かれた形態素に遡り、「干嘛」の第2音節と同様 ma に由来すると考えてよかろうが、「這麼」などの第2音節は「們」に由来し（現代北京語でも異形態として未だに zhèmen などと發音されることがある）、[mən]/mən/>[me]/ma/ の如き變化が起こったことになる。
- (20) 「中和」の概念とそのタイプについてはトゥルベツコイ『音韻論の原理』、もと1939年、長嶋善郎譯、岩波書店、1980年、246-258頁を参照。
- (21) 注9所引論文184頁。
- (22) 王力「唇音開合口辯」『廊坊師專學報（社會科學版）』1986：2などは合口三等が輕唇音化するという説を元に唇音の開合を定め、更に韻圖や陳澧『切韻考』における唇音の開合の歸屬の「誤りを正す」ことなどもしている。このように定見から出發してそれを別方面の客觀的事實により檢證する姿勢を持たずに手放しに押し通そうとする治學態度は危險である。
- (23) 表例は注5所引書24頁に倣うが、注2所引書27-29頁に従い、哈韻並母小韻を増加小韻として削り、灰韻明母小韻の反切下字を「杯」とする點を改めてある（これはいずれも切三が根據となっている）。
- (24) ここで滂母小韻が第8・第14小韻に重出しているのは、この中間にも斷層があり、陸法言が別の底本から字を收載する際に既に同音の小韻が存在することを見落したることによるであろう。注3所引論文の注34を参照。
- (25) Bernhard Karlgren, *Etudes sur la phonologie Chinoise*, livr. 4, Dictionnaire, 1926, p. 749, 39は「倍」が現代諸方言では合口の反映を示すので中古音に合口の音價を再構している（現代方言の例としては例えば廣州の「倍」phu:i 陽上, cf. 「裴」phu:i 陽平, 「佩」phu:i 陰去など）。注16所引李方桂論文70-74頁や趙元任・羅常培・李方桂譯、高本漢『中國音韻學研究』もと1940年、台灣商務印書館、1982年、582頁、39の譯注などは「倍」が開口の反切下字をとっていることを根據にしてこの再構に反對しているが、當時は『切韻』（實際には『廣韻』など）が金科玉條であったため無理もないけれども、『切韻』そのものを批判的に扱うことが可能になりつつある現在としてはカールグレンの方が結果として正しいように私には思われる。
- (26) 李永富『切韻輯料』、藝文印書館、1973年、第5冊、224頁。
- (27) 注26所引書、第3冊、168頁。
- (28) 注3所引論文の注15などを参照。
- (29) これは上聲に多く、馨・蟹・駭・産・歌などは上聲に限って（但し歌韻では去聲の諄韻も）合口韻母が何故か缺けているのである。また、董韻3等および冬韻に相配する上聲韻が缺けているのも同一現象であろう。そのほか拯・等・范の諸韻は上聲に限って所屬字が極めて少なく、こうした現象は上古音に遡って説明する必要がある問題である。
- (30) 『廣韻』では歌・寒韻系の合口韻母を分韻している（但し沒韻では開口の方を分出して曷韻とした）が、唇音小韻は一律合口韻の方に入れられている。この分韻は天寶本『唐韻』に始まると言われ、いずれにせよ陸法言『切韻』以後の措置であるから、後代の音韻變化を反映したものである可能性がある（李方桂「切韻 & 的來源」『歷史語言研究所集刊』3：1, 1931年, 7, 15, 18, 27-28頁を参照；同「論開合口」『歷史語言研究所集刊』55：1, 1984年, 4頁でも

『切韻』における唇音の開合について

同じ主旨が繰り返されている)。

- (31) 『七音略』『韻鏡』でも蟹攝2等韻の唇音小韻は概略的に言うと平上聲では開轉に置かれ、去聲では合轉に置かれている。
- (32) 但し李方桂「上古音研究」『清華學報』新9:1・2, 1971年, 55-57頁(北京商務印書館1982年單行本では75-78頁)は『切韻』から歸納的に求めたのではないが既にこの點を指摘している。
- (33) 現代北京語ではその他に反り舌聲母の後でも-uang という韻母が現れるが、これはもと-iang だったものが反り舌音に隨伴する合口調音の影響で合口韻母になったものと考えられる。
- (34) 有坂秀世『音韻論』, 三省堂, 1940年, 231頁に引かれたラテン語 bonum>イタリヤ語 buono の變化とその説明を参照。
- (35) 平山久雄「敦煌毛詩音殘卷反切の研究(中の3)」『東洋文化研究所紀要』90, 1982年は『毛詩音』において「開合一致原則」を用いてこれらの攝に所屬する諸韻の開合特性を求めている。その結果のうち、東韻系3等および魚韻系が開口、江韻系・侯韻系・覃韻系・狎韻が合口、豪韻系が半ば合口的となる(同論文は開合特性に7段階の區別を設けているが實際にはこの3段階程度で充分であろう)點は小文での推定と異なる。なお魚韻には何故か唇音小韻が存在しない(このほか之韻にも唇音小韻が存在しないのは不思議である)ため小文の主題とは開連しない。
- (36) カールグレン説として知られている(注25所引書漢譯本37-43頁, 416-419頁, 430-436頁参照)が、近年でも注32所引論文57頁(單行本77-78頁), 杜其容「輕唇音之演變條件」『中央研究院國際漢學會議論文集・語言文字組』1981年, 注22所引論文などのようにこの説の支持者がいる。
- (37) 輕唇音化については注16所引 Chao 論文pp. 223-227が、介音が high i で主母音が中舌または奥舌であるという條件で生ずるという假説を提出し、その際カールグレンの再構音價によると説明したい諸問題に對して平山久雄「唐代音韻史に於ける輕唇音化の問題」『北海道大學文學部紀要』15:2, 1967年が解釋を與えており、これでこの問題はほぼ解決済みだと理解される。ちなみに注9所引論文144頁には、陸志韋氏も同説を持しており、王靜如氏もそれに同意したことが記されている。